

令和5年度 学校経営計画に対する最終評価

集計結果で、()…R5中間評価データ 【 】…R4最終評価データ

石川県立野々市明倫高等学校 No.1

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)
1 ICTの効果的な活用や様々な学習形態を工夫することで、主体的・対話的で深い学びを実現し、論理的思考力、批判的思考力及び課題発見・解決能力を育成する。	① ICT機器によるGoogleclassroom、ロイノートといったアプリケーションを積極的に活用し、効果的な使い方を研究し、授業改善を実践する。	教務課 各教科	ICT機器によるGoogleclassroom、ロイノートといったアプリケーションの活用により、学習効果が高まった(aよく+bやや)と感じている生徒の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	※今年度新規目標 84.6% A (a 33.2%+b 51.4%) <84.4% A> <a 36.7%+ b 47.7%> 1年 79.8% B (a 29.8%+b 50.0%) <80.8% A> 2年 89.9% A (a 34.9%+b 55.0%) <90.6% A> 3年 84.6% B (a 35.8%+b 48.8%) <82.1% A>	前回の中間評価と比べて、a評価+b評価が84.6%となり、微増し、A評価を維持した。1年を通して、授業やその他の様々な場面において、生徒側も教員側もICT機器を積極的に使用しており、GoogleClassroom、ロイノートといったアプリケーションの活用が増えたことは評価できる。来年度は、現状に満足せず、ICT機器の有効活用を生徒とともにいろいろ試しながら、教師側のICT活用力のさらなる向上を図っていきたい。
	② グループワークやペアワークなどの授業形態を積極的に取り入れ、生徒の対話の場面を作り、教師による講義中心型の授業からの脱却を図る。	教務課 各教科	日々の授業において、グループワークやペアワークなどの授業形態を取り入れ、生徒の対話の場面を(a多く+b時々)設定している割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	※今年度新規目標 66.7% C (a 35.3%+b 31.4%) <71.2% B> <a 32.7%+b 38.5%>	前回の中間評価からa評価+b評価が5.5%減少し、評価がBからCになった。逆に、「cあまり当てはまらない」が32%で5.1%上昇した。要因としては、2学期初めに新型コロナやインフルエンザが流行し始め、教員も意識的にグループワークやペアワークを控えたことと、3年生は11月の終わり頃から、授業形態が共通テスト演習が中心になり、対話の場面が減ったことが考えられる。とは言え、生徒の主体性を育てるためには、グループワークやペアワークなどの授業形態を積極的に取り入れ、生徒の対話の場面を作ることが必須であると思われる。よって、来年度は具体的にどのようなグループワークやペアワークが有効であるかを教師同士で情報交換したり、検討したりする場を多くして、学校全体で取り組んでいきたい。
	③ 授業において、生徒が自ら課題を見つけ、教師と生徒及び生徒同士が意見交換する場面を積極的に設けることで、論理的思考力や批判的思考力を育成する。	教務課 各教科	日々の授業において、生徒が自ら課題を見つける活動を取り入れ、教師と生徒及び生徒同士が意見交換する場面を(a多く+b時々)設定している割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	※今年度新規目標 70.6% B (a 19.6%+b 51.0%) <73.1% B> <a 26.9%+b 46.2%>	前回の中間評価と比べてa評価+b評価が2.5%減少したが、続けてB評価を維持した。日々の授業において、生徒の論理的思考力や批判的思考力の育成のために、「生徒が自ら課題を見つけ、教師と生徒及び生徒同士が意見交換する場面を多くすることが大切である」という点においては、ある程度、教員全体に浸透してきたと言える。来年度はさらに授業でそのような場面を多くする工夫を考え、生徒の論理的思考力や批判的思考力を高めていきたい。
学校関係者評価委員会の評価	グループワーク・ペアワークは工夫が必要である。ICTの意識は高まっているが、情報能力は育成されているか。情報活用能力については、ツールを使ったときに生徒のどういう力が伸びていくか、アセスメントのデータをどう価値づけるかといったことも大切である。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	ロイノート等を活用し、ペアワークやグループワークの前に他者の意見を見た上で自分の考えをまとめるなど段階を踏んで行っている。また、ペアは隣に限らず、前後など同じ相手にならないようにしている。今後も有効活用を模索していく。入学した時点でICTを使うことに抵抗感はなくなってきた。ただ、情報を収集したり、加工したりするような活用能力については、できている生徒とできてない生徒がいる。教科等で目的を明確化して使用していかなければならない。				

重点目標	具体的取組	担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	
2)個別面談や探究活動を中心とする学習活動を通して生徒一人ひとりの可能性を引き出し、早期から進路調べやキャリア教育を積極的に行うことで、進路実現に向けての意欲と主体性を育む。	①	きめ細かい個人面談、進路調べ、キャリア教育などを通じ、生徒の進路意識を高め、自ら能動的に進路目標を設定し、学習に向かい、学力を高める努力をするような意識づけを行う。	進路指導課 学年 教科	面談や進路学習を通して、自らの進路選択に関する知識を十分に得ることができた(aよく+bやや)とする生徒の割合が、 A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 75%以上	※今年度新規目標 82.8% C (a 27.4%+b 55.4%) <80.4% C> 1年 78.5% D (a 21.5%+b 57.0%) <74.3% D> 2年 82.2% C (a 22.5%+b 59.7%) <84.0% C> 3年 89.3% B (a 41.4%+b 47.9%) <84.2% C>	前期に比べ全体のポイント数は上がった。1年生では、個人面談が1人につき複数回実施できたことや学級においてclassroom配信情報への興味を喚起でき、夏期休業中のオープンキャンパス参加以降も大学などが提供している個別プログラムに自ら参加する生徒も現れている。3年生は志望大学を吟味する際に、判定や学力だけでなく分野等へのこだわりを持って考えることができた。一方で、2年生のa評価のポイントが下がったが、大学出張講義・大学・企業見学などを実施したことによって徹底にとどまると言える。来年度の課題として、目にした情報から主体的な進路探究に繋がる仕掛けや、各種プログラムにおいては課題意識を持って能動的に参加し、振り返ることのできる仕組みを作ることが求められる。
	②	探究的な活動を通して、生徒が課題を発見し、解決策を模索することで、自らの興味関心や適性を自覚し、将来社会に貢献できる人材となるよう、取組を工夫する。	探究推進室	総合的な探究の時間の活動、特に課題解決学習活動を通して、社会問題により関心が高まり、将来の進路目標が以前と比べより明確になった(aよく+bやや)と感じている生徒の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	※今年度新規目標 76.3% B (a 23.9%+b 52.4%) <76.8% B> 1年 76.1% B(a 25.8%+b 50.3%) <75.6% B> 2年 78.6% B(a 20.5%+b 58.1%) <82.4% A> 3年 73.5% B(a 25.1%+b 48.4%) <72.1% B>	3学年とも前期とはほぼ同じような評価結果であった。1、2年生は今年度から本格的にエナジード(総合的な探究の時間のデジタル教材)を導入した。また、中心的な活動として、1年生は野々市市PR動画作成、2年生は明倫グローバルプロジェクト、3年生は進路探究を行った。それらの活動を通じて、社会問題により関心向けさせ、その結果、進路目標もより明確にさせようとしたが、3学年とも前期に比べて肯定的評価、特にA評価の割合が上がったとは言えない。総合的な探究の時間と志望する進路との結びつきをより強化する取組を考えていかなければならない。
	③	手帳等の活用により、生徒が自らの行動等について、先を見通したり振り返ったりする力を身に付けさせ、進路実現に向けての意欲や主体性を育む。	教務課 各教科	手帳等の活用により、進路実現に向けて自律的に行動する意識が高まった(aよく+bやや)と考える生徒の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	※今年度新規目標 36.6% D (a 10.3%+b 26.3%) <50.4% D> 1年 39.0% D (a 9.9%+b 29.1%) <50.5% D> 2年 29.5% D (a 7.0%+b 22.5%) <49.1% D> 3年 41.9% D (a 14.9%+b 27.0%) <52.0% D>	D評価であった中間評価のパーセンテージと比べて、a評価+b評価が13.8%も下がった。各学年についても同様の結果であった。特に、1年生と2年生が下降した。要因としては、多くの生徒がクロームブックの活用が浸透し、様々な課題や学校からの連絡は、GoogleClassroomで配信されることやクロームブックでいろいろ検索できること、そして、自宅においてもスマホでGoogleClassroomを見て、学校からの連絡、日程等を確認することができるが考えられる。今回の評価を踏まえ、来年度を迎える前に手帳等を活用すべきかどうかを検討する必要がある。
	④	進路指導課から各学年、教科に方針を発信することにより、教員全体の相互理解を深め、生徒の進路志望を実現するための学力向上の取組を組織的に行う。	進路指導課 学年 教科	3年生:1学期末に生徒が志望した学問分野・領域等 進学先の学問分野・領域等が一致している割合が A 80%以上 B 65%以上 C 50%以上 D 50%未満	※今年度新規目標 78.3% B ※「進路についての調査」(7月20日実施)に回答された学問分野・領域と進学先の学問分野・領域の一致率	担任を中心に、今後、生徒自身が関わっていききたい分野について深く考え、学部学科を定め、合格のための具体的な学習手立てを自ら考えるよう面談を進めた。生徒の思いを言語化し、志望を明確化することによって、生徒の主体的・能動的な進路実現への行動を促した。受験を通して本当にしたいことは何かという生徒の迷いや葛藤に寄り添いつつ、生徒自身の責任において選択させていくことによって満足していく進路選択ができたのではないかと考える。一方で、進学費用等による制約や学力不足による分野変更によって、約2割が一致していないと回答している。就学支援制度等の周知、より早い時期からの志望設定と実現に向けた学習計画が課題である。
			3年生:1学期末に生徒が志望した第1希望又は第2希望の進学先(大学・学部・学科、専門学校・専攻等)に進学できた割合が A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	※今年度新規目標 学校名での一致率 32.2% D 学部等での一致率 67.4% B ※「進路志望調査」(4月18日実施)に回答された第1・2志望と進学先の一致率	高い志望校設定により、学力を向上の意欲を喚起するこれまでの指導の流れを受けて、学校名での一致率は低くなっている。一方で本年は知名度や偏差値ではなく、進学後に取り組む分野や将来実現したいことを志望の軸に置いたことで、学部での一致率は高くなり、安易な進路決定ではなく、最後まで折れない姿勢で受験に臨むことができた。今後は、適切な目標設定とともに実現のための着実なステップを用意していく必要がある。	
			1・2年生: 学力を向上させることができた生徒の割合が A 65%以上 B 55%以上 C 45%以上 D 45%未満	※今年度新規目標 1年 58.2% B 2年 53.8% C ※総合学力テストの国数英3教科総合の全国偏差値で比較(1年は7月と1月、2年は1年7月と2年1月)	本年は特に、教員・生徒それぞれに、外部模試の小問別得点率や設問別ランクなど模試活用情報を提供し、効果的な学力の向上を目指した。データを活用した授業改善や課題提供が行われた一方で、教員・教科間に差があった。効果的な活用事例の紹介など、継続し情報提供を続ける必要がある。 また、第二学年の後半期は、自己分析→問題(弱点)発見→課題設定→実行のサイクルを意識した指導を行った。数値的な学力向上だけでなく、「自ら問題を解決し確実に力をつけている」という生徒自身の実感・自己肯定感を今後も大切にしたい。	
			1・2年生:年度末において、卒業後の学びたい学問分野・領域等(将来やりたい仕事等)が年度当初に比べて明確になった生徒の割合が A 75%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	※今年度新規目標 「進路に関するアンケート」(3月18日実施) 「現在の進路がどの程度明確か」について、「はっきりした」、「ある程度ははっきりした」と答えた割合が、 58.5% C (1年 43.5% 2年 73.5%)	第2学年では、従来の大学出張講義やインターンシップに加え、新たな試みとして、WEBを活用した大学の学びの探究、大学訪問、企業訪問、KUGS説明会、文系大学見学ツアーなど、生徒自身が進路を体験的に考える機会を重視した企画が数多く実施された。一方で、第1学年では、教科への苦手意識による進路選択や、現在知っている範囲での職業選択にとどまる傾向が強いことが担任の面談等でも問題になっている。苦手克服を目指し教科との連携するとともに、1年次段階からの学問・分野への興味関心を喚起する取り組み企画していく必要がある。	
学校関係者評価委員会の評価			・令和4年度卒業生の国公立大学の合格者数が減少している。入学者の募集定員が年度ごとに変化し、指導が大変だと思うが頑張してほしい。 ・進路指導をキャリア教育の中に位置づけているところがよい。教科教育と社会で起きていることを結びつけて指導してほしい。進路指導の中で研究室訪問があったが、自分のときはあまりなかった大学の教員や研究内容で進学先を選ぶという選択肢があるのがよい。 ・1年生が総探の授業で、野々市市役所に質問に来るが、ききたいことがふわふわしている。しっかりした答えを返したいので、こちらでも指導していく。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策			・意欲の面が入試で測れておらず、意欲の有無で学校生活の中で差が出てきている。成績不振の生徒に対しても、授業の内容、試験の作問、評価方法等を工夫し、支援・指導していく。 ・預かった生徒の進路実現のために、生徒の興味関心を引き出す面談を増やしたり、GoogleClassroomを活用し情報提供をするなど、これまでの指示する進路指導から支援する進路指導へと方針を転換している。			

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)
3 教職員はICTを効果的に活用し、生徒の教育活動における個別最適化を図るとともに、多忙化の改善に取り組む。	① ICT教育支援サービスを活用したり、課題を精選するなどし、個別最適な学びの実現を目指す。	各学年	ICT教育支援サービスを活用したり、朝学習や課題に取り組むことで、自らの学力を高めることができた(aよりbよりcよりdより)と考える生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	※今年度新規目標 76.1% B (a 22.3%+b 53.8%) <76.5% B> 1年 71.8% B (a 22.8%+b 49.0%) <72.9% B> 2年 81.0% A (a 21.7%+b 59.3%) <80.6% A> 3年 76.3% B (a 22.3%+b 54.0%) <76.8% B>	【1年】スタディサブリに関して、英語をはじめ、理科など積極的な活用が目立つようになってきた。今後も、担任間、教科間で情報交換しながら、より生徒の応じた、有効な使い方を検討していきたい。 【2年】スタディサブリを様々な教科で朝学習や週末課題、長期休業中として取り組むことができた。個々の生徒に応じて、学習の理解を深めるために活用することができた。 【3年】6月の県総体総文後に、朝学習の科目を生徒の学力や志望に応じたものに変えたり、教科内の科目変更など生徒のニーズに柔軟に対応した。また、小テストの解答をフォーム入力にするなど、手順の合理化にも工夫した。
	② 採点省力化ソフトを積極的に導入し、採点・分析・評価・返却に要していた労力を削減する。	教務課	採点省力化ソフトを活用し業務の効率化を図ることができた(aよりbよりcより)と考える教員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上	※今年度新規目標 98.0% A (a 80.0%+b 18.0%) <94.1% A>	中間評価と比べて、a評価+b評価が3.9%上昇し、ほぼ100%に近づいた。今年度は採点省力化ソフトによって業務の効率化が大いに図られたと判断できる。来年度は採点省力化ソフトの利用のノウハウを教員間で共有し、さらに業務の効率化を図ってきたい。
	③ 業務負担の軽減や時間管理の改善などにより、職員の多忙化改善を進める。	副校長 教頭	時間外勤務が80時間を超える教員の月平均の人数が A 0人 B 2人未満 C 3人未満 D 3人以上	月平均3.7人 D (4.5人 D) (単位:人) 4月5月6月7月8月9月10月11月12月 平均 80時間以上 8 5 1 4 2 6 6 0 1 3.7 うち100時間以上 1 2 0 1 1 1 2 0 0 0.9 【昨年80時間以上 10 8 5 4 1 7 5 3 0 4.8】	12月までの長時間勤務者数の月平均は3.7人で、中間評価(7月まで)の4.5人や昨年度の4.8人と比べ減少したもののD評価となった。定時退校日の毎月2回の設定・実行、採点省力化ソフトの利用やGoogleフォームを利用したアンケート集計など業務負担軽減に向けたICT活用、県教育委員会事務局産業医による長時間勤務者に対する面接指導の実施等により教員の意識改革に努めてきたが、時間外勤務が月80時間超、月100時間超の教員が一定数いる。学期はじめや部活動の繁忙期(4, 5, 9, 10月)に時間外勤務の増加傾向が見られるので、引き続き、授業や校務、部活動指導に見直しを持ちながら、ICTのさらなる活用をはじめとした業務改善や業務の偏りの是正等に取り組む、多忙化改善につなげたい。
学校関係者評価委員会の評価		野々市市が小中学校で携帯電話等を使用禁止にしてきたが、ICT活用の面で影響があるのではないかと。出身中学校で使用している機器やアプリケーションが違くと、高校は苦勞するのではないかと。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		ICTの活用において、市町による差はあまりない。OSの違いで最初戸惑う生徒がいるが、すぐに対応できているようだ。ICTに対するときの生徒の様子は注意深く見ていきたい。			

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)
4 部活動や生徒会活動の活性化とともに、地域行事への積極的参加を通して地域貢献に努める中で、視野を広げつつチャレンジ精神やレジリエンスの涵養を図り、明るく活力ある学校づくりを推進する。	① 保護者にPTA活動等に積極的に参加してもらい、教育活動をバックアップしてもらう。	総務課	学校行事やPTA活動で保護者が来校した・または職員とのやりとりを電話などでした回数の平均が2回以上の割合が A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	来校または職員とのやりとりした回数が 5回以上 14.8% <4.3%> 4回 11.7% <3.9%> 3回 23.1% <13.3%> 2回以下 50.4% <78.5%> D	3回以上来校または職員とのやりとりをされている保護者が49.6%である。今年は春5月以降、感染予防のための制限が緩和され、明倫祭や授業参観、発表会などに来校される方が増えたと思われる。学校の活動を見たり、教職員と情報共有をしたりする機会を積み重ねて本校の教育活動を理解、協力していただいたり、生徒支援を充実させたりする一助としたい。引き続き各種連絡に努めていきたい。 ※アンケートの「2回以下」の中で「2回」来られた方がわかるように次回変更します。
	② 本校の教育活動、生徒の活動の成果をホームページ上に掲載し、広く情報を発信する。	総務課	ホームページ上のアクセス数が月間平均で A 30,000以上 B 25,000以上 C 20,000以上 D 20,000未満	ホームページのアクセス数は(単位:件数) 4月 36,343 【36,477】 9月 35,007 【*37,296】 5月 38,456 【41,218】 10月 61,712* 6月 46,122 【36,124】 11月 53,007 【*35,955】 7月 43,974 【44,730】 12月 43,484【 29,210】 8月 20,401* *印は2か月分平均 *太字は最終評価で追加したもの 月平均 42,056 【29,210】 A	各課・学年行事や部活動について旬の情報が伝わるよう、こまめな更新を呼び掛けている。今年度は学校をより身近に感じてもらえるよう教職員リレーブログを立ち上げ、多彩なテーマの記事を楽しんでもらっている。PTA広報委員の画像を掲載した明倫祭のあとはアクセス数が急増した。ソフトウェアの制限もあるが、これからも、たとえばスマホでも見やすいよう心掛けたり、中学生にも学校のイメージ・メッセージがよく伝わるような工夫をしていきたい。
	③ 部活動の加入を促し、学校全体の活性化を図ることで、生徒のチャレンジ精神の向上とレジリエンスの獲得を目指す。	生徒課	1,2年生の部活動の加入率が A 90%以上 B 85%以上 C 83%以上 D 83%未満	93.3% A 【昨年度:91.2%】 1年99.4% (加入321人 在籍323人) 2年86.0% (加入234人 在籍272人)	1年生は全員登録をしていることから部加入率は高いが、設備以上の多人数が入部している部活動もあり、十分な活動ができていない課題がある。また、生徒の部活動に対する意識は低くなっているため、学校生活を意欲的に取り組むためにも、部活動への意識を高め、充実感・達成感を味わえるよう工夫をしていかなければならない。
	④ 生徒会行事、地域の行事への主体的な参加を促し、生徒一人ひとりが充実感・達成感を得られるよう推進する。	生徒課	委員会・生徒会活動、地域の行事に主体的に参加し、充実感・達成感を得ることができた生徒(aよく+bやや)の割合が A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	66.9% D (a 22.8%+b 44.1%) <65.8% D> 【昨年度:61.6%】	今一度、各委員会の担当の教員や生徒に委員会活動の大切さを理解してもらうとともに、生徒が積極的に地域行事に取り組むよう努めていきたい。
学校関係者評価委員会の評価	与えられることが多い恵まれた環境の中ではあるが、自立し、困難を乗り越えていく人間力を身につけてほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	部活動や探究活動を活性化し、失敗も含め、様々な体験を積ませることで、人間力を養成したい。地震に際し、生徒会は募金活動を行った。生徒のボランティアに対する意識をさらに高めていきたい。				

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)
5 節度ある生活習慣の確立に努め、自ら挨拶し、読書に親しみ、ボランティア活動等にも積極的に参加する心豊かな人材の育成を図る。	① 登校指導や生活指導などを通して、挨拶がしっかりできる人間の育成を図る。	生徒課各学年	朝の挨拶運動などで、生徒同士や教職員、外部からの来客に対し、進んで自分からしっかり声を出し挨拶できた(aよく+bやや)生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	85.0% A (a 31.2%+b 53.8%) <85.6%A>【昨年度:82.2%】	昨年度よりも挨拶をする環境が生まれ、自然と挨拶を行うようになっている。今後も生徒主導の挨拶運動を企画したり、教員側からも積極的に生徒へ挨拶するよう、さらに努めていきたい。
	② 登校指導や生活指導などを通して、自ら身なりを正すことで規範意識を育成する。	生徒課各学年	制服を意識的に正しく整えている(aよく+bやや)生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上	96.8%A (a63.6%+b33.2%) <97.5%A>【昨年度:93.3%】	制服着用の際の組み合わせを明示したことにより、生徒はしっかりと着用できていると感じているようだ。ただ制服の着こなしについては、考え方が多様化しており、今後教員間で共通理解をもって指導できるよう努めていきたい。
	③ 交通安全教室や街頭指導を通して、自転車の安全運転の励行を図る。	生徒課各学年	交通ルール(自転車運転でイヤホン着用や並列走行をしない)を遵守している(aよく+bやや)生徒の割合が A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上	93.1%C (a64.0%+b29.1%) <94.3%C>【昨年度:93.3%】	交通ルール違反は命に関わる大きな問題であることを意識させようとしたが、まだまだ意識は低いように思われる。一般の歩行者からも注意の電話を受けており、交通ルールは必ず守るものであり、自分だけでなく他者の命を守るためにも交通ルールの遵守について継続して指導していきたい。
	④ 学校内外のボランティア活動への積極的な参加を促すとともに、ボランティアに参加したことへの達成感や地域貢献への意識を高める。	生徒課各学年	ボランティア活動に、積極的に参加した生徒(aよく+bやや)の割合が A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	56.7%C (a17.3%+b39.4%) <68.9%B>【昨年度:55.1%】	今年度は学校全体だけでなく、部活動単位で複数回活動ができる新しいかたちでのボランティア活動も企画したところ、多くの部が実施するに至った。今後も学校が企画するボランティア活動をきっかけとして、社会貢献への意識が育成されるよう計画していきたい。
	⑤ 生徒の良好な人間関係作りを支援する。	相談室各学年	学校生活が楽しいと感じる生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	89.7%B (a44.4%+b45.3%) <91.0%A>【昨年度:88.4%】 1年88.8%B(a47.7%+b41.1%) 2年91.4%A(a42.2%+b49.2%) 3年88.8%B(a42.3%+b46.5%)	1年生が3.3P低下しているのが中間評価AからBになった原因である。2、3年はほとんど変化がないことから、この低下は高校生活に抱いていたイメージと実際の高校生活とのギャップが理由の者が一定数いると推測される。ただ、学校に「居場所」があればb評価で取まると考えると、教室や部活動以外の「居場所」を提示するなどの対策を講じていく必要がある。
	⑥ 情報の収集、共有を密に行い、困難を抱えた生徒に対して早期に対応し支援する。	相談室生徒課各学年	いじめや人間関係などの生徒の変化に対して、素早く察知し、対応することができたアンケートをとり、あてはまる割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 80%以上 D 80%未満	92.5%A (a30.2%+b62.3%) <96.3%A>【昨年度:94.2%】	a「よく」が多少上昇したがb「やや」が減少した。2学期以降突然の長期欠席や進路変更が増加し、「気づけなかった」と感じる場面が出てきたものと思われる。生徒が教員に気づけられないようにしていることに気づくことは困難を極める。また本人の自覚がないまま不登校に入る生徒も増えている。教師がアンテナを高くしておくことも大切だが、生徒自身が変化を自覚し、言葉で伝えられるように、普段から働きかけたり相談できる環境を整えたりすることが大切である。
	⑦ 定例清掃の活動を通して、環境美化意識を高める。	保健環境課	環境美化を意識し真面目に清掃に取り組んでいる生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	92.8%A (a44.6%+b48.2%) <91.9%A> 1年93.7%A(a48.0%+b45.7%) 2年93.1%A(a38.4%+b54.7%) 3年91.6%A(a47.4%+b44.2%)	全校生徒の結果ではアンケートの回答項目a「よく」とb「やや」の合計が中間評価より約1%増えた。しかし、全学年で「よく」が約5%減る結果であった。今後は「よく」と回答する生徒の割合を増えるようにしたい。その為に生徒が愛校心を持てるような取り組みに努めていきたい。
	⑧ 図書委員による図書便りや本の紹介の作成・発行などの図書案内や各学年団と連携した一斉読書といった読書指導によって読書に親しむ習慣を身に付けさせる。	図書課	生徒一人あたりの年平均貸出冊数が A 5冊以上 B 3冊以上 C 2冊以上 D 2冊未満	2.06冊C (1月19日時点) <0.9冊>	新入生ガイダンス、3年生の総合的な探究の時間、総体・総文時の1年生一斉読書、新入大会時の1・2年生一斉読書など、教科や各学年団と連携した取り組みを行った。また、読書週間など図書館行事や冬期休暇前に貸出冊数の上限増の取組をしたが、一人あたりの冊数に結びつかなかった。今後も多方面に働きかけ、生徒の読書習慣の向上に努めていきたい。
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・震災の生徒の心への影響が心配である。 ・生徒と教員間、教員間のハラスメント等の処理は適切か。学校での生徒の安全・安心が確保されているか。 				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒は感じるころはあるだろうがあまり口に出していない。生徒の様子を学校全体で注意して見ていきたい。 ・生徒の安全、安心については、体罰等の調査を実施しているので意思表示をする機会はある。教員間については、大きな問題となるようなことはないが、アンテナを高くしていきたい。 				